



フロントランナー

Front Runner

神奈川県横須賀市に建設中の石炭火力発電所を半年ぶりに見に来たら、「こんなに進んでいた」。計画を認めた国を相手に提訴した住民らを支援する。「脱炭素の時代に逆行する。今からでも撤退の方が国や企業のためです」

世界も注目「脱石炭」の旗手

環境NGO「気候ネットワーク」国際ディレクター・理事 平田 仁子

いつも非対称の闘いに挑んできた。目指すは地球温暖化に歯止めをかけること。化石燃料から風力や太陽光など再生可能なエネルギーへの転換を一刻も早く、意見する相手は政府や電力会社をはじめとする大企業。

ちっほけなNGOの言い分は、そうやすやすと聞き入れてはもらえない。

連戦連敗。それでも手を替え品を替え主張を繰り返す。声高に叫ぶのではなく、膨大な資料を読み込み海外のNGOと情報交換し、戦略を練る。「さばさばとした性格なので」と涼しい顔で言うが、「見えないところでものすごく周到に準備をしている」と同僚も舌を巻く。

そんな粘り腰でこつこつと小さいながらも風穴をあけてきた。東日本大震災による事故で一斉に停止した原発に代わり、化石燃料の中でもとりわけ多くの二酸化炭素を出す石炭火力発電所の建設計画が相次いだ時もそうだった。企業や政府が情報を出し渋る中、2013年からキャンペーンを張り、仲間とともに新たな計画が50基に上ることを独自に調べ上げた。山が動いたのは4年後の17年。1基、2基と計画を中止する発電所が現れた。

手応えを感じつつ、でもこの程度でぬか喜びできない、と思っていたら、海外のNGOからは「やったね」と称賛の嵐だった。今では17基の計画が撤回に。

十分とは言えないが、「各国の温暖化対策の加速を促すパリ協定に企業や国が押された面もあるが、私たちが最初に声を上げたからこそ変化を起こせたと思う」と成果を誇る。

この功績が今年、草の根の環境活動家に贈られる「ゴールドマン環境賞」の受賞にもつながる。

環境分野のノーベル賞と呼ばれる権威ある賞だが、自分一人での受賞に当初は辞退も考えた。「仲間や住民らが一緒に取り組んだおかげだから。でも、これ みんなが勇気づけられ、運動にはずみがつくならと考えを改めました」。

目標を見定められずにいた学生時代。講義で聞いた、あるNGOの女性の言葉に心を揺さぶられた。「日本を基準とするのではなく世界のものさしで物事を見て」。

同じころ、ブラジルで地球サミットがあり、気候変動が焦点に。化石燃料によるエネルギーを大量生産・消費している私たち自身が地球の破壊者であることに衝撃を受け、この世界に入るきっかけとなった。

気候変動問題の解決への道筋を政府間で話し合う国連主催の年次会合(COP26)が31日から英国グラスゴーで始まる。今回は脱石炭が焦点の一つ。各国NGOを束ねる組織のリーダーの一員でもあり、2週間の期間中、「交渉の行方からいつときも目が離せない」。

文森治文―相場郁朗

―国連主催の会合で焦点となる石炭問題を詳しく教えてください。

議長国の英国が国の合意に導きたい四つの目標の中に、カーボンニュートラル(温室効果ガスの排出との均衡)の早期実現のために各国の対策を野心的に強化するというのがあり、対策メニューの筆頭に挙がっているのが石炭火力発電の全廃です。

先進7カ国(G7)の過半数は2030年までの全廃を表明していますが、日本政府は石炭火力をやめるのかどうかすらはっきりと言っていません。世界中のNGOの中で日本を代表する立場にある私は、日本政府に石炭火力の全廃の表明を求め続けるとともに、会合での政府代表の言動をチェックして各国NGOと

ともに評価したり、記者会見などで世界に発信したりすることになります。

「本気」の渡米で

ーゴールドマン環境賞も受賞し、今や気候変動問題に関わるNGOで欠かせない存在ですが、学生時代の半ばまでは全く関心がなかったとか。

高校生の時はもっぱら部活と遊びばかりで、新聞もほとんど読みませんでした(笑)。大学では女性の自立について教えられました。就きたい仕事も見つからなかった時、講義で日本国際ボランティアセンターの元事務局長の女性と出会いました。事務所に入りにして世界で起きている問題を目の当たりにしたり、留学生との交流に参加したりする中で地球温暖化の深刻さに気づかされて関心がどんどん強まりました。それで環境の仕事がしたいと思いながらも、当時は英語も得意でなく、普通に就活をして出版社に入りました。

ーでも、思い切って退社し、米国ワシントンのNGOへ。なぜですか。

仕事の合間に環境問題の本を読むなどしているうちに思いが募り、やりたいことをやらずにいたら一生後悔するだろう、と。それでラジオ講座で英会話を勉強し、コネもない中、環境政策に強そうな米国のNGOに受け入れてもらいました。26歳になって初めて本気になりました(笑)。

ビザの関係で1年限りの米国では絶対何かをつかみ取って帰ろうと、必死で毎日、所長にくっついてNGOはもちろん研究者など新しい人にも会って話を聞いたり、人間関係を作ったりしました。政策提言などを担うNGOの組織のことも学んできました。

株主提案武器に

ー気候ネットワークでは石炭火力発電所の建設を止めたこと以外にも成果がいろいろありますね

ー大きな手応えを感じたのは昨年と今年。気候ネットワークが株を持つ大手2銀行に対し、気候変動対策の国際ルールのパリ協定に沿った経営方針を求める株主提案をしたところ否決はされましたが、それぞれ議決権がある株主の34.5%と22.7%の賛同を得た。これだけの投資家が動けば、石炭火力などに向かうお金の流れが変わり、脱炭素への道筋を作れると思えました。以前には、国に報告されている大規模工場などのエネルギー消費量の情報公開を求め、燃料に使う石炭が多い工場を明らかにすることによって改善を促すようなこともしました。

ー一方で、40歳のころから6年間、大学院に通っています。その理由は

ーいつも成果を得られるとは限らないNGOに身を置き続けていると、物の見方が固定化したり視野が狭くなったりしているかもしれない。現場を見るだけではダメで、研究書の中に答えが転がっているのではないか。そんなことを考え、環境政策を専門にする政治学の先生の下で学びました。ただ、じっくり勉強する機会を持たたと感じた一方で、現実問題として政策を変える原動力になるのはやはりNGOが適していると思ひ、博士課程を修了したあとは気候ネットワークの活動に専念しています。

ー最近はスウェーデンのグレタ・トゥンペリさんをはじめ、若者たちの活動も目立ちますね。

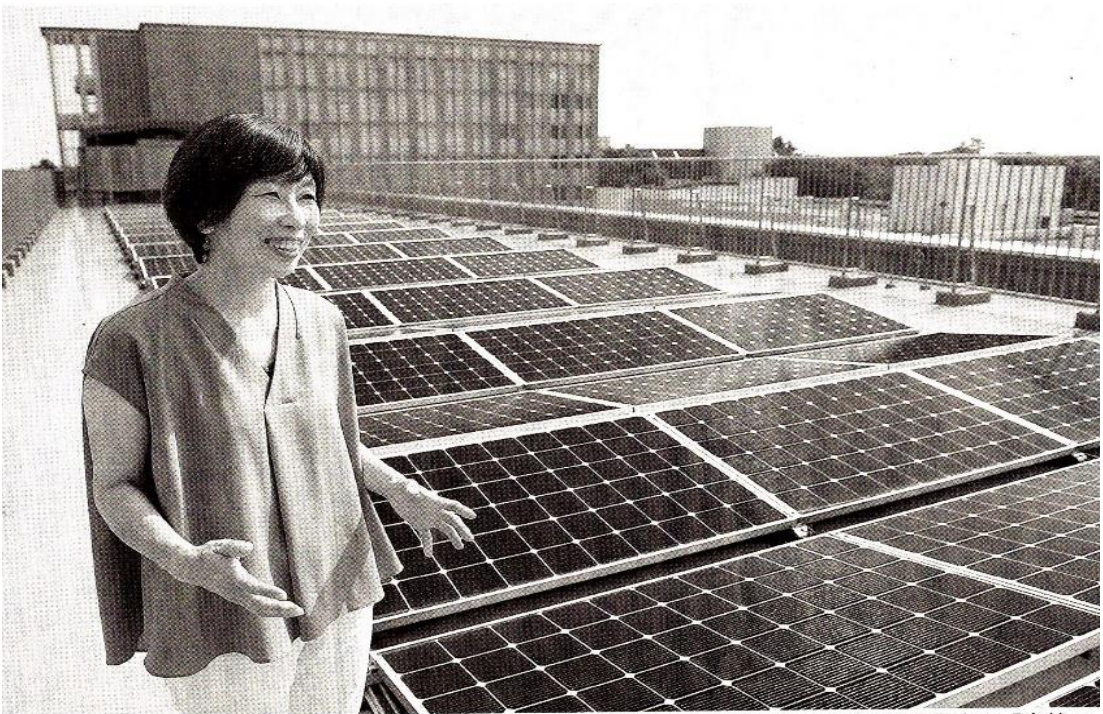
ー彼女は思いも強いし、影響力を持って人を引っ張っていくのはすごい。でも、大人になる頃に保刻な温暖化

が起きるといふ危機感で若者が行動せざるを得ない
というのはせつない。若者にも期待したいですが、真
に行動すべきなのは大人じゃないかと思えますね。

「気候変動を最小限にするため、産業革命前からの
平均気温の上昇を1.5度未満に抑えることが求めら
れています。NGOの目から見て可能でしょうか。

かなり厳しいです。対策を先延ばしにしたツケが回っ
てきていますから。でも可能性はまだ閉ざされていな
い。そこが大切だと思います。本気になって転換を成
し遂げれば、1.5度未満に抑えることができるとい
うのは、今を生きる私たちの希望じゃないですか。

この問題は「解決が」難しい」と思いながら取り組ん
でいてはダメなんで未来がかかっているから、やるし
かないんです。



特別客員准教授をしている千葉商科大は、校舎の屋根に取り付けた太陽光パネルなどで消費電力の「自然エネルギー100%」を実現。その助言役も務める。「周辺大学にも、その輪が広がっています」=千葉縣市川市